

「豊島館と共産党・石神井会議」

2022 年 12 月 4 日（日）13:30～14:10

会場：石神井公園ふるさと文化館多目的会議室

講師：葛城明彦（郷土史家・作家）

■豊島館

1915（大正 4）年の武蔵野鉄道開業、「石神井」駅（現・石神井公園駅）開設後の観光開発の流れ（当時の村長・栗原鋤三が土地を貸し、誘致を行う）の中で、1918（大正 7）年頃に設けられた料亭。本館側＝武蔵野館の“別館”として建てられ、宿泊の扱いは無かったとされる。当初は武蔵野鉄道の直営であったが、1934（昭和 9）年以降は個人経営となった。昭和初期には俳人・高浜虚子らが訪れており、大正期に日本共産党綱領草案が起草された地としても知られている。なお、「豊島」の名は、中世に練馬を領していた石神井城主「豊島氏」にちなむ。のち太平洋戦争開戦頃からは保谷硝子（現：HOYA）の社員寮となり、同時に「豊島館」の名は消滅した。また、1944（昭和 19）年からは陸軍の“慰安所”とされたほか、終戦後は満州・シベリア等の引揚者住宅となった時期もあった。その後は、一般向けアパートとして存続することとなり、1960 年代の終わり頃からは石神井池の東にあった「東光精機」（「東光建設」？）の社員寮「山田東光寮」となっている。建物は昭和 1975（昭和 50）年 12 月に取り壊された。

■武蔵野館

武蔵野鉄道が、1934（昭和 9）年まで経営を行っていた 2 館のうちの本館側で、「武蔵野館」の名も鉄道の名にちなんで付けられている。なお、当時の「家屋売渡証」には「武蔵野ホテル」と記されており、「武蔵野館」の名は誤伝であった可能性も残されている。個人経営となって以降は豊島館経営者夫の兄らが経営を行うようになり、改装後は「石神井ホテル」に改称された。豊島館同様、1944（昭和 19）年からは陸軍の“慰安所”になっていたこともあった。1949（昭和 24）年からはホテル業を止め、「石神井アパート」に改称、一般向けアパートとなっている。1935 年頃には“天才美少女バイオリニスト”と呼ばれた諏訪根自子、作家の檀一雄や画家の南風原朝光、今井滋、美術評論家の四宮潤一ら芸術家たちが居住したこともあり、檀はここで「太宰治入水」の報にも接している。豊島館より遅れて、1977（昭和 52）年 9 月頃に取り壊された。

■見晴亭

豊島館・武蔵野館同様、栗原鋤三村長が貸し出した土地で、営業を開始したと伝えられる茶店。創業年は不明であるが、両館とほぼ同時期であったと考えられる。昭和 10～20 年代にはさまざまな文士らが訪れており、彼らにとっての憩いの場にもなった。1937（昭和 12）年には檀一雄・太宰治らが「青春五月党」というグループを結成しているが、その会合の際には党員が集結しており、太宰はこの店の池側の縁台で酒を呷っている。店舗は 1993（平成 5）年頃に取り壊された。

■武蔵野鉄道「石神井駅」(現・「石神井公園駅」)の開業と豊島館

1915(大正4)年に武蔵野鉄道および石神井駅(現・石神井公園駅)が開業…それと前後して周辺の観光開発が急速に進む

◇当時、三宝寺池の周囲はすべて栗原家(元名主・当時村長:太田道灌に従って石神井城を攻め落とした千葉自胤の家臣の末裔とされる)の私有地⇒栗原は村の発展のため、一部を提供したほか、安価で貸し出し、旅館・料亭・茶店などを多数誘致…「豊島館」「武蔵野館」「見晴亭」などもその流れの中で開業

◇日帰りの観光客が多数訪れるようになるが、依然多くの人々には「辺鄙な場所」と認識される…駅前には数軒の「待合」も開業、「ワケあり男女」などが密会する場所となったほか、周辺旅館は秘密の会合にも使用される→豊島館が、当時「非合法(地下)組織」だった共産党の会議場所として選ばれたこと背景となる

※戦時中に陸軍成増飛行場の弾薬庫・燃料庫・特殊慰安所・謀略機関(偽札の管理ほか)・皇統護持計画本部(終戦直後)などが設けられたのも「目立たない場所だった」ことが理由であったと伝えられる

※「石神井池」は1934(昭和9)年に新たに設けられた人工池(ボート池)

■豊島館・武蔵野館・見晴亭関連年表

改称の歴史

◇豊島館(昭和16年まで?)→保谷硝子寮(昭和19年まで)→陸軍慰安所(終戦まで)→(地元では昭和30年代後半まで特定の名称無し ※郵便物は住所のみまたは「アパート」で届いたとのこと)→山田東光寮

◇武蔵野館(昭和9年まで。※実際の名称は「武蔵野ホテル」?)→石神井ホテル(昭和19年まで。途中では陸軍慰安所、終戦~昭和24年までは再び「石神井ホテル」に)→石神井アパート

◇見晴亭…改称なし

1918(大正7)年頃

料亭(料亭旅館?)「豊島館」・旅館「武蔵野館」が、栗原三村長の所有地だった三宝寺池の南側斜面上に並んで建ち(栗原より借地)、両館がほぼ同時に営業を開始する(同時期に、茶店「見晴亭」も営業開始か?)。

※両館はともに武蔵野鉄道所有直営。豊島館は武蔵野館の「別館」の料亭として創業されている。

※現在も営業している茶屋「豊島屋」も、やはりこの頃栗原水車付近(三宝寺池東側)で営業を開始している。豊島屋の当時の経営者は栗原三の親戚とされる。

1923(大正12)年

◇豊島館で共産党臨時大会(「石神井会議」)が開かれ、共産党綱領草案が作成される。また、その直後頃に豊島館西側建物が増築される。この年、「第一次共産党事件」が勃発、豊島館も官憲に包囲されて捜索を受け、同時に豊島館主人らも取り調べの対象とされる。

◇関東大震災発生。被災者対策として、東京府が上野公園内で営業していた「一力茶屋」に、三宝寺池そばの土地を貸与する(「一代限り」の契約)。

1929（昭和4）年頃

江戸文化年間からあった栗原分家所有の「栗原水車」が廃止される。同時期に、「豊島屋」本店が水車付近から現在地に移転（水車側は「分店」となり、昭和50年代まで存続）。

1930～1931（昭和5～6）年頃

「ホトトギス」同人が吟行を行い、豊島館で夕食を摂る。

1932（昭和7）年

「ホトトギス」同人（高浜虚子も参加）らが再度同館を訪れるが、館内は荒廃しており、無人の状態（当時の様子については、本田あふひがのち『武蔵野探勝』に記す）。
※同年には武蔵野鉄道が経営難に陥り、箱根土地社長の堤康次郎（＝西武グループ創業者）が再建に乗り出している。これらの状況から考えれば、すでに武蔵野鉄道はこの時点で豊島館の経営から撤退していたとも考えられる（「ホトトギス」同人が訪れた際の状況は、そうした事情が反映されたものだったか？）。

1934（昭和9）年

◇この年4月には豊島館側が「新井茂」氏の経営となっていることが確認される。茂氏は都電の運転手を本職としており、館の経営は妻の「いち」に任せていた。個人経営になって以降の「豊島館」は常時営業しておらず、原則として団体の事前予約が入った時のみ店を開けることになっていたと伝えられている。
※『「豊島館」の経営者は李香蘭（日本名：山口淑子）の親類だった』との説もあったが、これは誤りであったことが判明している。

◇10月18日、武蔵野鉄道が「小野たか」氏に武蔵野館を売り渡す。
※「家屋売渡証」によれば名称は「武蔵野ホテル」となっている。「武蔵野館」という名称は最初から存在していなかった（従来言われていた名称は誤りだった？）可能性もある。
※同年8月28日には武蔵野鉄道が鉄道抵当法に基づく強制執行により運賃収入が差し押さえられている。ここから推測すれば、武蔵野鉄道はその負債を埋めるため、武蔵野館経営から撤退し家屋を売却したとも考えられる。なお、同年8月26日には人工のボート池「石神井池」がオープンしているが、これも何らかの形では売買に関連していた可能性があると思われる。

1935（昭和10）年

5月19日、小野たか氏が新井岩松氏（豊島館経営者夫・新井茂氏の兄）に武蔵野館を売り渡す。一部は洋風（洋間）に改装され、名称も「石神井ホテル」となる。この頃（？）、一時諏訪根自子（「天才美少女バイオリニスト」）と父親が同館に居住。
※「小野たか」氏の経歴、新井氏との関係等は不明。

1937（昭和12）年5月

檀一雄・太宰治らが「青春五月党」という男女交際グループを結成、その会合の際に党員は見晴亭に集合し、その後太宰は同店縁台で酒を呷る。

1941（昭和16）年

太平洋戦争開戦頃、保谷硝子が軍用望遠鏡増産のため事業を拡大（豊島館・石神井ホテルはともに開戦後、行楽客が激減したため経営難に陥る）。同社は従業員が急増したため豊島館の部屋の大半を買い取り、これを社員寮とする（※当時～現在、保谷硝子社長は石神

井池そばに居住)。

1944(昭和19) 4月～1945 (昭和20) 年 (終戦時)

旧・豊島館 (保谷硝子寮)、石神井ホテルが陸軍に供出される。豊島館の経営者一家は新潟県佐渡ヶ島に疎開 (石神井ホテル側経営者一家の行き先は不明)。陸軍は、これを主に成増飛行場の兵士らを対象とした “(特殊) 慰安所” とする。

※当時、同所は「慰安所」では無く「女郎屋」「売春宿」等の名で呼ばれていた。

1945 (昭和20) 年、終戦後～

◇終戦後、間もなくして石神井ホテルは営業を再開。しかし、“慰安所”時代のイメージ定着によるものか、公園でデートをした男女の “情事の間” (現在でいうところのラブホテル) や、地元売春婦らの “営業先” として使用されるケースが増え、地元では「連れ込み旅館」「売春宿」等と呼ばれる。

◇旧・豊島館は再び保谷硝子の所有になったと考えられる (昭和20年代半ばまでは同社社員が多く居住)。

1947 (昭和22) 年

石神井ホテルに檀一雄が投宿、この年10月頃には “リツ子もの”、最初の作品『終わりの火』を執筆し、川端康成に託す。

1948 (昭和23) 年

作家・檀一雄と妻ヨソ子が、石神井ホテルに5月から10月まで居住。檀はこの年、『終わりの火』以後の “リツ子もの” を書き継ぐ。同階には真鍋呉夫も投宿。檀と真鍋 (※真鍋の著書ではこの2人だけだったとされているが、実際には、檀の父親違いの弟・高岩震も一緒) はこの年6月16日朝、石神井ホテル内および見晴亭で「太宰治入水か」(入水日は6月13日) との報に接する (檀は直後、『さみだれ挽歌』を執筆)。

1949 (昭和24) 年

「石神井ホテル」経営者がホテル業を止め、同館をアパートとする。名称も「石神井アパート」とし、看板も変更する。

◇石神井アパートでは、画家の南風原朝光・今井滋、美術評論家の四宮潤一らがアトリエ・住居を構える。以後、佐藤英男 (洋画家)・具志堅聖児 (日本画家)・木内岬 (彫刻家)・山之内穉 (詩人) にも訪れるようになり、同館は芸術家らの “たまり場” となる。

※ “池袋モンパルナス” (アトリエ村) 近くの沖縄料理店「おもろ」「珊瑚」等での交流がきっかけと伝わる。

終戦～1950 (昭和25) 年頃

◇旧・豊島館の一部が、シベリア・満州等からの引揚者用アパートとなる。一部屋には満州からの引揚者が集団で居住。また、共産党幹部の1人 (向啓太氏のことか?) も居住し始める。そのため、同館は地元の住民から「共産党アパート」の名でも呼ばれ始める。昭和25年には「レッドパージ」 (=赤狩り) により、旧・豊島館が官憲に包囲され、同館の住民・経営者が連行される。

※「当時～閉館まで、館の外壁には『赤旗』ポスターが貼られてあった」との証言あり。

1952 (昭和27) 年

文化活動団体「石神井談話会」が発足。檀一雄・真鍋呉夫・五味康祐・南風原朝光・四宮

潤一・新井政芳（石神井アパート経営者）らが参加。会は1961（昭和36年）頃まで存続（同年には南風原朝光が交通事故により急逝）。

1960～1964年（昭和30年代後半）頃？

石神井池東にあった「東光精機（他の保谷硝子関連会社？「東光建設」？）」が旧・豊島館の大半を買い取り、保養所兼社員寮とする。同館は以後「山田東光寮」と改称される。

1965～1969年（昭和40年代前半）頃？

明治大学の合宿所にも指定されていた石神井池西北端の「三武旅館」^{みたけりよかん}が廃業。その直後には一時期、「石神井アパートもしくは山田東光寮の一部が、同大学の合宿所に指定された」との話も伝わるが、真偽は不明。

1970～1974年頃（昭和40年代後半頃）

山田東光寮の一部が資材置き場となり、居住者も僅かとなる。

1975（昭和50）年

12月9日、山田東光寮が取り壊され、更地となる。解体前日には共産党員約30人が集まり、追悼行事を行う。今井滋は別れの際、住民たちに1枚ずつ三宝寺池の油絵をプレゼントする。

1977（昭和52）年

9月に石神井アパートが閉鎖される。取り壊されたのち、跡地は更地となる。

1993（平成5）年頃

茶店「見晴亭」が取り壊され、更地となる。

1995（平成7）年頃

三宝寺池畔の「一力茶屋」が廃業、建物も取り壊され更地となる。

◎豊島館に関する記録

「当時は、私の住んでいた大森（現、大田区）などもまだ田舎で、総同盟本部のある芝（現・港区）など旧東京市内に出かけることを『東京に行く』と土地の人は言っていたくらいだが、石神井一帯（現、練馬区）はそれ以上に辺鄙で、文字通り農村であった、わたしの大好きな国木田独歩の散文に描かれている武蔵野の代表的な風物を残していた。今日の、駅を中心にした商店街や、公園の周囲の住宅街などは、当時は、もちろん無かった。途中で駄菓子か雑貨を売る店が一、二軒あったのを覚えているくらいである」（1977年＝昭和52年『風雪のあゆみ』野坂参三・著：1923年＝大正12年の共産党臨時大会開催当時の豊島館に関する記憶）

「さて、この池の畔を少し行ったところで、わたしは大阪で弁護士をしている小岩井浄に、ばったり出会った。（中略）それから少し行くと、会場の豊島館はすぐに見付かった。料理店とはいうものの、閑静だけが取り柄の、粗末な『お休み処』にすぎなかった。ここに掲げた写真（※同書掲載）は戦後に撮ったものだが、昔は粗末とはいっても、これほどに荒れてはいなかった。また、これほど大きくもなかったような気がする。おそらく、あとから増築されたのであろう」（同）

「わたしが小岩井浄と前後して豊島館の玄関に入ると、時計工組合の渡辺満三がいて、手際よく二階の奥の部屋に案内してくれた。そこには襖を取りはらった十畳ほどの部屋が二つつづいて、わたしが知っている顔ぶれや、初めて会う人など十数人が、すでに集まっていた。そして、午前十一時ごろには、二十数人がそろった。会合の表向きの名義は、肥料会社の株主総会ということになっていると誰かから聞いた。みんなそれらしく装いながらも、思い思いの雑談をして開会を待っていた。客の入り具合を見て茶を運んで来る女中の姿が座敷に現れると、会話が一齐に途絶えて、緊張を隠し切れずにいたが、その空気を切り換えようとするかのように、堺利彦が大声で冗談を言い、一座の笑いを誘っていた。そのうちに人数だけの井飯が運ばれてきて、早目の昼食を済ませた。費用を節約するためとはいえ、料理屋に来て井物をとるとは、とんだお客だと思って、わたしは、ひとりで苦笑した。食後も、少しのあいだ雑談がつづき、会議が始まったのは、十二時近くになってからであった。

この臨時大会は、さきにも述べたように、前月に千葉県の市川で開かれた第二回党大会の決定にもとづいて、党の綱領草案を継続して審議することを主要な課題にして招集されたものであった。したがって、その参加者としては、党の中央委員と細胞代表者、それにコミンテルン第四回大会に出席して綱領草案を持ち帰った日本代表と綱領起草委員が指名されていたようである。その出席者名は、のちの裁判記録その他の資料から総合して、中央委員の堺利彦、上田茂樹、浦田武雄、杉浦啓一、仲宗根源和、吉川守罔、渡辺満三、中央委員と細胞代表者を兼ねた小岩井浄、佐野学、辻井民之助、細胞代表者の荒畑寒村、市川義雄、猪俣津南雄、近藤栄蔵、高津正道、高野武二、田所輝明、西雅雄、山本勝蔵、渡辺政之輔、細胞代表者でもあり、コミンテルン第四回大会の日本代表でもあった川内唯彦、それに同じく日本代表であった高瀬清、綱領起草委員としてにわたしの計二十三名であった。しかし、わたしは、参加者のすべてを記憶していないので、これが正確か、どうか断言できない。このほか、金子健太、橋浦時雄、平林初之輔が出席したという説もあるが、これもわたしの記憶からは明らかでない。なお、この席に、当然、山川均が姿を現すものと、わたしは期待していたが、とうとう来なかった。その理由を誰も説明しなかったが、わたしは、かれが病身だからこんなに遠くには出られないのだろうと推測していた」(同)

「さて、最後に、この歴史的に意義のある石神井会議の議事に結末をつけなければならない。

会議は昼食を済ませたあと、ときどき休憩をとりはしたものの、夕食もたべず、予定の時間を大きく超過して、延々八時間も激論を続けたのち、猪俣議長が閉会を宣したのは、早春も夜にはいった九時前だったと思う。このように長い時間激論を交わしながらも、誰一人として疲れを訴えた者はいなかった。それは、五十歳を越えたのは堺利彦だけで、わたしたちみんなは、まだ若かったこともあるが、さらに、みんなが前衛党の綱領を創り出すことの決定的に重要な意義を理解して、それへの使命感と熱意に燃えていたからにほかならなかったと思う。

それにしても、考えてみると、非合法の党会議としては、ずいぶん乱暴なやり方であった。『会社の株主総会』を料理屋で開くというのならば、酒なしで、昼食を井ですませた

り、夕食を抜きにして、むつかしい議論ばかりやっているということは、いささか常識はずれであると言えよう。もし豊島館の主人が、少しく政治的に敏感で、この『株主総会』に疑惑をいだいて、コッソリと警察に通報していたら、この重大な党大会の顛末は、いったい、どうなったであろうか。それを思うと、ゾッとするのである。おそらく、ここの主人は、この会議が、よほど貧乏な倒産寸前の会社の総会で、だから、あんなに紛糾したのだからに推察していたのかもしれない」(同)

「橋を渡ると一軒の料理屋(※豊島館のこと)がある。一・二年前に末枯の時分に十五・六人で吟行して、畑の大根を煮さして夕餉を取った事のあるところである。

(中略)

料理屋の玄関はひっそりとしている。看板も出ていない。がらがらと玄関の硝子戸を明けて見た。奥の方をすかして見ると広い縁側は真白な埃ほこりのまま人の通った足形もない。玄関の側の座敷にハタキと箒ほうきが向き向きに投げ出してある。

棚の上に積み重ねてある皿や井鉢は薄埃がしていた。時計が四時半で止まっていた」
『武蔵野探勝』昭和7年6月5日・本田あふひ記)

◎豊島館に関する証言

「戦時中の旧・豊島館(および石神井ホテル)は陸軍の慰安所になっていて、訓練を終えた成増飛行場の兵士たちが通っていた。その頃は『慰安婦』という言葉はまだなくて、そこは『女郎屋』と呼ばれていた。中にいたのは地元の売春婦ばかりだった」

「豊島館には戦後、満州からの引き揚げの人がいた。1人が契約すると、そこへ何人もの人間が転がりこんだりしていた」

「昔の三宝寺池の中の島には、対岸から石神井アパート側までを繋ぐ形で2つの橋が架けられてあった。石神井アパートや豊島館の人たちはよくそこで布団を干していた」

「豊島館の玄関脇には井戸があって、美味しい水が飲めた。美味しいのは近隣でも評判になっていて、居住者以外の人にもよく汲みに来ていた。住民が苦勞したのは風呂で、最後まで水道がなかったため、井戸の水を汲んで浴室まで運ぶのが大変だった」

「豊島館にはガスも引かれていなかった。そのため、煮炊きはみな外に出て七輪で行っていた」

「取り壊される直前の豊島館は廃墟に近かった。もう人は住んでいないのかと思っていたが、それでも夜になると奥の方でボウッと灯りがついたりしていた」

「取り壊される時には、石神井アパートに住む画家の今井滋が、三宝寺池などの絵を1枚

ずつ住民にプレゼントしてくれた。今井がいた頃、豊島館の人間は『そんなんでも食っていけるのかよ』などといってからかったりしていた」

◎武蔵野館・見晴亭に関する主な書籍中の記述

「私が東京に出て来て、はじめて檀一雄さんにお逢いしたのは、檀さんが石神井ホテルで『リツ子その死』の末章を書いていたころだった。先に東京に居を持っていた友人のまえだすみのり前田純敬が『檀さんに敬意を表しておくといいよ』とあって、八百屋で柿の実をいくつか買って、それを手土産にして、ホテルを訪ねた。昭和二十一年（※注：実際は昭和 22 年）であったと思う」（〈図録〉『生誕 100 年 檀一雄展』伊藤桂一稿・公益財団法人 練馬区文化振興協会発行）

『檀さんがいま、石神井ホテルで仕事をしている。のぞいてみよう』

とあって、前田純敬が私を誘ってくれ、石神井ホテルに出向いたのが、私が檀一雄に会った最初である。この時檀一雄は『リツ子・その死』の末章を書いている、前田に、『題を「終わりの日」にしようか、「終わりの火」にしようか考えているんですよ』と、いった」（『太宰治と檀一雄』伊藤桂一・記＝1947 [昭和 22] 年の記憶：山梨県立文学館編集発行）

「その檀に、東京へ出ていくことを強く勧めたのは義母だった。私は太郎と福岡に残り、檀は石神井公園の池のほりにある、石神井ホテルという、いわゆる連れ込み宿風の旅館を根城に書きはじめた。石神井には律子さんとの新婚時代からの土地勘があったのだ。

（中略）

私にとって初めての東京生活は連れ込み旅館（＝「石神井ホテル」のこと）での生活だった。しかし、その旅館の御主人は私たち親子にとてもよくしてくれた。本来、そうした旅館を利用する人は食事をしないで帰るのが普通だろう。ところが、ろくに宿泊代も払わない私たちのために、わざわざ朝晩の食事を用意してくださったのだ」（『檀』沢木耕太郎・著：檀ヨソ子の「石神井ホテル」滞在時回想場面）

「その前後、檀さんと私は荒廃した石神井ホテルに泊まり込んで、原稿を書き続けていた。なにしろ、二人とも上京の旅費を工面するのが精一杯で、宿代の持ち合わせさえなかったのだから、死に物狂いで書くほかはない。仕方がないので、それぞれ二階の六畳と八畳間に陣どってほとんど毎日のように徹夜を続けていたが、やはりそういう徹夜明けの朝まだきのことであつた。部屋の中はそれほどでもなかった雨の音に、

『やれやれ、今日も雨か・・・』

と寝ぼけまなこをこすりながら階段をおり、何気なく玄関に投げ込まれていた朝刊を拾い上げたとき、たんに『太宰治氏失踪』とか、『愛人と家出』とか『玉川上水に遺留品』とか、そんな一号活字がいっせいに眼に飛びこんできた。（中略）

その新聞をつかんで階段を駆けのぼり、檀さんの部屋の襖をあけるなり、半ズボン姿で机に向かっていた檀さんに、

『檀さん！太宰が失踪したそうですよ』

『えっ。太宰が・・・』

と檀さんは絶句したまま、私が渡した新聞の裾の方を胡坐の下に敷きこみ、しばらく頭を垂れてその記事に眼をはしらせた。そのうちひょっこり青黒くこわばった顔をあげたと思うと、

『ちょっと見晴亭に行ってみましょう。ほかの新聞がみたいんです』

そういってもう立ちあがっていた。

見晴亭のお婆さんは何事がはじまったのかというような顔をして、びしょ濡れになった檀さんと私をむかえた。そのお婆さんにうむを言わず朝刊を借り、カストリとこんにゃくの田楽を頼んで、いつもの縁台に上がりこむ。

(中略)

「無事だといんですけど、どこへ行ったんでしょうかねえ」

うっかり言わでものこを口にする、

「いや、死にました。太宰は今度は死にました」

宙を見据えるようにそう言ってカストリを呷った一瞬、檀さんの目尻を横ざまに奔った短い涙の筋が、店の薄暗さのせい、妙に白っぽく浮き上がって見えた」(『天馬漂泊』真鍋呉夫・著：1948 [昭和 23] 年太宰治失踪時の回想)

※注：実際には新聞を取って来たのは高岩震。上記文章には一部創作が含まれている。

「それでも私の好きな真鍋呉夫を実に大切にしてくれる人として、檀さんを私は信じ、いつかは会いたいと思っていたから、私はこの来訪をよろこんだ。その後石神井ホテルへ一緒して私も大酒を飲んだ。(中略)

みんな、逢ったこともない青年たちばかりだったが、彼らがこの国の文学を支えてくれる日が必ず来るだろうと昂然と私は断言したりした。私には断言しなければならぬものが悲しみとして胸に一杯していたから。すると不意に『歩きましょう。ネ』檀さんは先に立って傾いた貧しいホテルの窓から庭に飛出した。私もつづいた。

ホテルは石神井池(※注・三宝寺池の誤り)の傍らにあって、池にまたがった石の橋(石神井池中の橋か?)にたたずんで檀さんが大声に『魔王』を唄い出したのを私は貴い記憶として己の《青春》にとどめる。私も京都の人の前でシューベルトの『魔王』をうたった日があった。檀さんの歌詞は所々間違っていた。それが涙が出るほど私にはとおとく感じられた」(『指さしていふ一妻へ』五味康祐・著)

「檀さんはひとむかし前、初代さんと別れたあとの太宰や伊馬春部さんなどと結託して、『青春五月党』という奇怪な集団を結成したことがある。(中略)ところが、その第一回総会を石神井公園でひらき、ホテルの隣のこの茶店(※注：見晴亭のこと)に腰を据えて飲みはじめたまでは上々であったのに、やがて我にかえってあたりを見回してみると、青年というにはいささか^{とう}臺の立ちすぎた大幹部の三人だけ縁台に取り残されていた。肝心の少女たちは、高橋幸雄さんなど、正銘の青年黨員たちに誘われて、いつのまにか^{おおあぐら}ボート池の方へ蒸発してしまっていたのである。そこで太宰もやけくそになって大胡坐、

『こりゃ、ひでえ。こうなったら、大幹部はもう立派になるほかはない。それには髭をは

やすのが一番だけど、普通の髭じゃつまらんからね。どうせはやすんだったら、やっぱりカイゼル髭だ。よし、われわれ幹部たるもの、この際ひとつ奮起して、いっせいにカイゼル髭をはやそうじゃねえか！』

そんなことを口走りながら大はしゃぎでコップ酒を呷ったという、その縁台である」
（『天馬漂泊』真鍋呉夫・著）

■豊島館と共産党

野坂参三は、前述の通り「もし豊島館の主人が、少しく政治的に敏感で、この『株主総会』に疑惑をいだいて、コソコソと警察に通報していたら、この重大な党大会の顛末は、いったい、どうなったであろうか。それを思うと、ゾッとするのである。おそらく、この主人は、この会議が、よほど貧乏な倒産寸前の会社の総会で、だから、あんなに紛糾したのだからに推察していたのかもしれない」と記す⇒昭和9年に個人経営に変わって以降、取壊しに至るまで、豊島館経営者は共産党シンパだった可能性あり…いきさつは不明

◇「第一次共産党事件」が勃発した際は、豊島館も官憲に包囲されて捜索を受け、同時に豊島館経営者らも取り調べの対象とされる（この時は武蔵野鉄道直営の時代なので、経営者は無関係？）

◇終戦～1950（昭和25）年頃、一部がシベリア・満州等からの引揚者用アパートとなり、共産党幹部の1人も居住→地元住民から「共産党アパート」の名でも呼ばれ始めたと言われる

◇1950（昭和25）年には「レッドパージ」（＝赤狩り）の際にも、官憲に包囲され、同館の住民・経営者が全員連行される

◇その後も「レッドパージに遭った人らが住んでいた」との証言あり

◇「当時、館の外壁には『赤旗』ポスターが（閉鎖まで）貼られてあった」との証言も

⇒過去のいきさつもあって、シベリアからの引揚者、共産党幹部らが住み着くようになり、それに感化され経営者も共産党シンパに？